

Support for Woman Doctors ～私からあなたへ～

野手 桃子(旧姓 食見) 先生【千葉 27 期】
お子さん (4 人)



自治医大を卒業し、同じ硬式テニス部だった富山県の同級生と結婚して4人の子どもに恵まれました。これまでの私の経験が誰かの参考になれば幸いです。

初期臨床研修後に結婚して卒後5年目に1人目の子どもを授かり、今まで懸命に突っ走ってきた医療の道から一旦離れることとなりました。仕事を中断することで自分だけ取り残されるのではないかと、自分1人で子どもを育てられるのか、不安なことばかりでした。出産後は育児の大変さを思い知らされ、不安を感じている暇はありませんでした。1～2時間毎の夜中の授乳は研修病院の当直と同じ位かそれ以上に大変でしたが、子どもは本当に可愛くてずっとそばで成長を見ていたいと思いました。

1人目の子どもが生後2か月の時、突然発熱して入院。入院後もしばらく原因が分からず、敗血症として抗生剤を投与されましたが、解熱しませんでした。入院中は1日中付き添い、夫の勤務先病院だったので仕事の合間に夫もできる限り付き添ってくれました。小さな体で色々な検査を受け、発熱でぐったりしている我が子の姿を見ても何もしてあげられず、不安ばかり募りました。しばらくして川崎病の不全型とわかり、適切な治療で解熱しましたが、この時の患者の家族としての不安な気持ちは忘れることができません。川崎病は学生時代から勉強し研修医の時も経験したことのある、よく知っている病気だったにも関わらず、実際に自分の子どもがかかると医者ではなく「お母さん」になってしまうのです。そして、患者の家族がどんな気持ちでいるのか、医者にどんな言葉をかけて欲しいのか、分かった気がしました。復帰後の診療にこの経験が役立ち、患者さんに寄り添った声掛けや気持ちを汲んだ病状説明を心がけるようになりました。

その後診療所勤務、1年間の後期研修を経て2人目を授かり、再び育休をいただきました。復帰後は千葉県の派

遣病院で内科医として勤務し、当直やオンコールもありました。この時は

実家の両親に協力してもらい、子どもが病気の時は実家にあずけました。当直は金曜日だけにしてもらい、夫が保育園のお迎えの後そのまま泊りがけで遊びに連れて行ってくれたりしたため、私がいけない時間も子どもたちは楽しく過ごせたようです。周りの多くの人の支えのおかげで、夫よりも2年遅れて義務年限を無事終了することができました。

3人目、4人目は義務終了後に授かりましたが、4人目の出産後に再び患者の家族となる経験をしました。新生児仮死で出生後すぐに救急搬送されたのです。それまで3人も自然分娩で元気に生まれてくれたので、初めての「生まれてすぐに泣かない赤ちゃん」でした。出産後、慌ただしく処置を受けて夫に付き添われてあっという間に救急搬送されていく我が子を、ベッド上で呆然と見ているしかありませんでした。面会に行って NICU で人工呼吸器に繋がり、すべての手足に点滴や動脈ラインが入って鎮静剤で眠っている我が子を見て、この子を抱っこできる日が来るのだろうかと思涙が止まりませんでした。1週間は病状が安定せず、面会時間以外に病院から電話があると悪い想像ばかりしてしまいました。幸いなことに病状は快方に向かい、それ以降は面会の度に繋がっていた管が減っていきました。初めて抱っこした日、初めて授乳できた日のことは忘れることができません。健康に生まれて育つことがどんなに幸せなことか、改めて実感しました。

今4人とも元気に育ち、私も非常勤医として内視鏡と外来業務を中心にマイペースに仕事を続けています。家族が健康であること、皆の支えがあって仕事を続けられることに感謝し、これからも医者として人として成長していきたいと思っています。

後輩へのメッセージ:

「仕事を休んだ期間も決して無駄にはなりません。焦らず、子供の日々の成長を見逃さずに過ごしてください。」

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。
連絡先:自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係
E-mail: chisui@jichi.ac.jp